

第2回百年史研究会報告

第2回百年史編纂事前研究会は、村井益男氏（元日本大学百年史監修者・同編纂委員・同専門部会長）を講師にお招きし、2008年2月26日（火）、板橋校舎2号館にて行われました。

村井先生は日本大学の史学科（旧制）卒業後、東京大学史料編纂所においておよそ30年にわたって研究実績を積み、昭和57年より母校である日本大学法学部教授に着任され定年退職されるまで史学教育に力を注がれて来ました。一方で、日大へ戻られて6年目に年史編纂委員を委嘱され、以後20年あまりにわたり日大百年史の完成に尽力されて来られました。現在も日本大学資料館設置準備室において、資料収集やアーカイブ活動に関する顧問的役割を果たしておられます。

村井先生へは事前に、年史編纂に必要な基本的事項と編纂過程で生じた具体的な問題点とについて支障のない範囲で事例を交えてお話いただければとお願いしていました。それを受ける形で、（Ⅰ）資料収集・全体構成・編纂活動、（Ⅱ）「資料編」掲載資料の精査、（Ⅲ）大学史の性格とは、というおおよそ3つの流れに沿ってお話いただきました。

（Ⅰ）については、①全学体制で組織された百年史編纂委員会による第1回会議において明らかになった多くの課題について、例えば、既存の『90年史』に10年分を付け足すだけで編纂を行うことができるとの意識が内部にあったことや、編纂室に学内外の史資料が収集されていないために原資料の確認が行えなかったことなど具体的事例を挙げ、②それらの課題や問題点をふまえた上で、すでに決定されていた全5巻構成は変更できないまでも執筆者及び編纂方針自体を見直すこと、掲載資料や論稿の典拠（根拠）を明らかにしていくこと、学外資料を収集しつつ学内資料の収集については全学体制による協力を求めたこと、などについて説明いただきました。

（Ⅱ）次に、①刊行の理想順序は「資料編」→「通史編」→「年表・索引」であり、遠回りに見えても「資料編」によって基礎を固めておくことが良い結果に繋がること、②資料収集のときに周辺事実の調査や資料整理、目録作成、索引まで同時進行できれば理想的であること、③基本年表は必ず先に作成し、大学史に関する基礎知識の共有を図ること、④「資料集」の刊行はその後の「通史編」の原資料収録の目安にもなること、⑤執筆者同士の合意や意思・知識の共有のために定期的な研究会を設け意見しあうことも必要であったこと、など具体的な編纂過程の説明をしていただきました。

（Ⅲ）最後に「大学史」の持つ性格について、①アーカイブスは大学にとって広報的役割も求められること、②私学にとっての歴史とは「教訓」であり「鏡」であるため歪んだ歴史認識では役に立たないこと、③「評価」は後世に譲るとしても歴史的事実（資料）は確実に整理保存されなければならないこと、④歴史の中から何が現在に生かされなければならないかを示すことが必要であり、制度史だけでなく学術史・学問史として向き合っていくこと、などについて言及されました。

以上、具体的な事例をあげての説明かつ編纂過程で生じた課題・問題点も率直にお話いただき、その後は出席者より多くの質問が出され活発な議論が行われました。

（大東文化歴史資料館・浅沼 薫奈）



村井 益男 氏

第2回百年史編纂事前研究会に参加して

— 課題と対策 —

今回の研究会では、日本大学の大学史編纂委員会が監修をつとめられた村井益男先生をお迎えし、『日本大学百年史』編纂の経緯についてお話を伺いました。

日本大学においては、すでに『50年史』、『70年略史』、『90年史』と順次大学史を刊行してきた実績があります。それ故、学内では、これらの蓄積を踏まえ、そのまま百年史刊行に移行できるという雰囲気が当初から強かったようです。ところが、百年史編纂の責任者となった村井先生は、『90年史』プラス10年の記述で済ますような姿勢をとらず、従来の大学史に綴られた記事の根拠を創立者の時点から明らかにすることを第一義とし、学内資料はもとより公私立の資料館・文書館に直接当たることから取り組み始めたそうです。そのため、結果としては、第一回の編纂委員会の設置から『日本大学百年史』全5巻の完成までにはほぼ20年の歳月を費やしたということです。

村井先生は、東京大学史料編纂所における長い勤務経験をも踏まえて、これから大学史の編纂に取り組む場合、大学史の性格づけや学術性を高めるためにも、資料による客観性の裏づけが絶対に不可欠であると強調されました。その際、資料調査にあたっては、資料収集と同時にカードで整理しながら目録・索引・年表を作成しておくことが大事であるなど、具体的な事例を指摘していただき、大変意義深い研究会となりました。

本学においても、今まで『50年史』、『70年史』と刊行されておりますが、百年史編纂に向けては、『プラス30年の記述』であってはならないことを痛切に感じとることができました。これを踏まえるとき、本歴史資料館の直面する課題は、限られた人員・予算の中で、いかにして資料の収集、調査、研究を継続していくかということでありましょう。そのためにも、本資料館では、百年史編纂委員会の立ち上げにむけて専門部会のようなものを設け、中長期の基本方針を定めるとともに、学内の教職員に広く呼びかけて研究班活動を実質的にスタートさせるときではないかと思えます。

（大東文化歴史資料館運営委員・東洋研究所教授 兵頭 徹）